ちるでもわかるさるの
のさんすうきょうしつ

夕立氏

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

何でも分かるようになってしまったとある氷精さんのお話。

目次

気づいた時には —— 1
全知全能 —— 6
壊れた硝子細工 —— 16
無知 —— 22

1

気づいた時には

「――どうして」

微かに自嘲的な笑みを漏らした氷精はつぶやく。

「あたいは何も分かってはいなかったんだね」

「だーいーちゃぁぁぁん!!!!ねぇーー!!!あそぼぉぉぉぉー!!」
「あはは、チルノちゃんは今日も元気だねぇ」
「うん！大ちゃんと遊べると思ったらあたい元気しか出てこないよ」

「そっか、私もチルノちゃんと遊んでると元気出てくる。今日は何して遊ぶ？」
「えっとねぇ…鬼ごっこして…あと蛙凍らせて遊ぶ!!」
「え、また?蛙さんが可哀想だよ…」
「いいの!!!すぐ溶かしてあげるからだいじょーぶ！」
「んー…じゃあひとまず鬼ごっこして遊ぼ、ね？」
「わーい！大ちゃん大好き!!」
「…私もだよ、チルノちゃん」

小さな氷精に
「好き」
そう伝えた妖精の笑顔は

・・・・・・・・・・・・・・もうどこにも残っていない。

「あたいってば天才ね…鬼ごっこの神と呼ばれる日もそう遠くないわ」
「ぜぇ、ぜぇっ…チ、チルノちゃん速いよ……」
「だってあたいなのよ?当たり前じゃない」
「さっすがチルノちゃん…んー、でももう疲れたよ…」
「いいよ、休憩にしよー!えーっと…あ、あそこの木の下で休もう！」
「あ、ありがとうチルノちゃん…ぜぇ…」
「じゃああそこまで競争ね！いっくよー!!」
「ま、待ってチルノちゃ～ん…」

＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜

「…ねぇ、チルノちゃんは好きな人とかいないの？」

「ふひまひほ⁇」
「あぁチルノちゃんお菓子食べながら喋っちゃダメ…ってそのお菓子どこから取ってきたの？」
「んー？そこに落ちてたよ‼」
「拾い食い⁉ダメだよチルノちゃん‼‼どうみても危ないじゃん‼」
「えー？そうなのー？大ちゃんは心配症だなぁ」
「心配症とかそういう問題じゃ…」
「気にしなくていいよ‼‼それで、好きな人っていうのは？」
「え、好きな人は好きな人だよ？」
「大ちゃんはいるの？」
「…え？いや、えと、あの…」
「好きな人かぁ、あたいと遊んでくれる人ならみんな好きかな‼だから大ちゃんも好きー」
「ふぇっ⁉チ、チルノちゃんいきなり抱き着かないでっ」
「ちぇー大ちゃんのケチー」
「…チルノちゃん、私もチルノちゃんのこと好きだよ」

くらくらするくらい膨大な量の情報が頭に入ってくる。

そんな中
小さくて、
脆くて、
きらきらとしていて、
触れたら壊れてしまいそうな、
まるで硝子細工のような、
そんな妖精のことをひとり思い出していた。

全知全能

ひどく混線している脳内に膨大な量の情報を吐き出し続ける「世界」を、

ただ1人、呆然と眺めていた。

後悔なんて、意味を成さない。

もう、いくら泣いたって喚いたってこうなってしまった以上はどうしようもないのだ。

ただ無知が故に、小さな氷精と妖精は、
あっけなく、
壊れてしまった。

＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜

全てが分かる。

過去のこと、
現在のこと、
未来のこと、

全てが分かってしまう。
分からないことは無い。
何処かのさとり妖怪かのように、そこ行く者の思考も、
全ての者の思考も。
さとり妖怪のように、読むのではない。
流れ込んでくるのだ。
ただ、底の無い貯水湖のように。

ひたすら、流れ込んで来て、

自らの存在を主張する。

当然、「記憶」というメモリーにも底が無い。

ただひたすらに流れ込んで来た全ての記憶を貯めていってしまう。

「たすけて、」

そう呟く事も小さな氷精には許されない。

彼女も、自業自得だと分かっている、

いや、以前の彼女であれば分かる筈が無かったであろう。

「分かってしまう」から、口には出さない。

そう、今何をすべきかなんてとっくに分かっている。

ただ、それをしてももうあの頃に戻ることなんて無いのだ。

何でも分かるんだったら過去に戻る方法くらい知っているのではないかって？

否、「不可能」の３文字が虚しく脳裏に浮かぶだけだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

もう、どうしようもないのだ。

「チルノちゃん、あーそーぼー」
「んん…大ちゃん…おはよ…」
「珍しいね、チルノちゃんまだ寝てたの？いつもは鶏さんとどっちが早起きか勝負してるのに」

「うーん…眠い〜…」
「そっかぁ…じゃあ今日遊ぶのやめる？」
「えーーー!!!やだやだやだやだ!!!大ちゃんと遊ぶーーー!!!!!!」
「ふふ、そういうと思ったよ。じゃあ外で待ってるから支度しておいで」
「分かった!!!絶対待っててね!!!すぐ行くから!!!」
「はぁい、了解しました〜」

＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

「ねぇ、チルノちゃん」
「なぁに？もう1回かくれんぼして遊びたい？」
「あ、えっと、そうじゃなくって」
「？」
「少し相談があるんだけど、良いかな？」
「良いよ!!!天才のあたいに何でもきいてみな!!!」
「う、うん。ありがとうチルノちゃん」

「早く早く！早くしょうだんして!!」
「し、商談…？な、なんかそれちがう…？大丈夫かなぁ…」
「大丈夫だって！あたいに知らないことなんて何にもないから！ほら早く！」
「うん…分かった…じゃあ言うね」

「恋って何かな」

何が天才だよ。

全知全能の氷精は、

記憶の中の、
ただひたすら無知な自分に嫌気が差していた。

「何でも知ってる」、「天才」と豪語していた自分が、
自分の1番大切な人を1番苦しめ、傷つけていた事に、
全知全能となった今、やっと気付く。

しかしそれに気付いても

もう遅い、のだ。

壊れた硝子細工

「こい？あの魚？」
「そっちじゃなくて、人を好きになる方のコイ！」
「あー、なんかちゅーしたりする方でしょ？」
「ちゅ、ちゅー!?ちちチルノちゃんっいきなり何言ってるの!?」
「だって、好きな人とは『ちゅーして、はだとはだであたためあう』ってこの前べろんべろんになったすいかが話してた」
「どうして？」
「はっははははだとはだであたためあぅぅ!!!?それみんなの前で言っちゃダメだよ!?」
「え、いや、その…とにかくダメ」
「わかったけど…今日の大ちゃん何か変だよ？」
「…そ、そうかな」
「分かった!!!"こいのやまい"だ!!!おとめだ!!!」

「!?!!…恋の病なんて誰から聞いたの…？」
「まりさとれいむ」
「あの人達か…全く…」

＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

「チルノちゃん、もう1つきいてもいい？」
「んー？いいよ」
「チルノちゃんはさぁ、誰かのこと好きなの？」
「あれ？それこの前もきかれた気が…」
「えっと、友達としての好きじゃなくて、恋愛としての好きの方…って言ったら分かる…かな？」
「れんあい？」

「恋だよ！」
「もうちょっと分かりやすく言ってよー」
「えーっと…つ、つまり…」
「うん」

「ちゅ、ちゅーしたいかどうかってこと!!!」

「ちゅーしたかったら〝コイ〟なの？」
「そ、そうだと思う」
「大ちゃんはさぁ、友達とかとちゅーしたいって思わないの？」
「えっ？」

「〝コイ〟っていうのは男の人と女の人の間のものじゃないの？」
「…？」
「あたいは、大ちゃんとキスしたいと思ってるけど…大ちゃんは男の子じゃない」
「どうゆうこ…ぅむっ」

乱暴な口付け。

お伽噺なんかに出てくるような甘い接吻ではなく、
歯と歯がぶつかり合うような、ただひたすらに乱暴で強引なキス。
口内が幼い舌で蹂躙される。
頭の蕩けるようなキスに、思わず力が抜けてしまう。

長いようで、短い、

淡く溶けていった、ふたりのファーストキス。

酸素を欲して、氷精が顔をゆっくりと離す。

お互いの口の間に透明な糸が伝う。

「ぷはっ………チ、チルノちゃんいきなり何して」
「やっぱ違うんだよなー…大ちゃんのことは好きだけど〝コイ〟じゃないと思う」
「…それは私が女の子だから？」
「違う…と思うけど大ちゃんはれんあいてきに好きではない」
「私は、チルノちゃんが好きだよ、恋愛的に」
「え？」
「チルノちゃんが好きなの」
「え、あたい女だよ？」
「そんなの知ってるよ。でもチルノちゃんが好きなの。」
「え、だからあたいは女…」
「チルノちゃん」

「な、なに、？」
「何でも知ってるんだよね、天才チルノちゃんは」
「ど、どうしたの大ちゃん、あたい何か言った？」
「何でも、知ってるんだよね？」
「そ、そうだよ、あたいは天才だから」
「そっか、じゃあ教えて」

「この気持ちはどうすればいいの？」

「ねぇ、教えてよチルノちゃん」

無知

「だ、大ちゃんどうしたの？」
「早く教えてよチルノちゃん」
「えっ、あ、その」
「私はチルノちゃんのことが好きだよ。でもずっと頑張って我慢してきたんだよ」
「あ、あたいも…大ちゃんのこと好きだけど…うーん…」
「『恋じゃない』、でしょ？」
「…今日の大ちゃんおかしいよ!?もう家に帰ろうよ!!」
「チルノちゃんの嘘つき」
「何ですって!!?あたいのことを嘘つきって言うなんて今日の大ちゃんほんとどうかして

る!!大ちゃんのばーか!!」

「あはは」
「!?」

「馬鹿はチルノちゃんだよ」
「はぁ!?あたいは馬鹿じゃないわ!!天才チルノ様に馬鹿って言った方が馬鹿なのよ!!」
「何にも分かってないくせに」
「ぜ、全然そんなことないし!!」
「でもチルノちゃんは私がチルノちゃんのことを好きなの知らなかったじゃん」
「むぐぐ…とにかくあたいは馬鹿でも嘘つきでもないわ!!」
「あっそう、じゃあ天才チルノちゃんにもう一回聞くね」
「私がチルノちゃんのことを好きな気持ちはどうすれば収まるの?ぶつけていいの?ねぇ」

「あーーー!!!もう訳分かんないよ大ちゃん!!!そんな女の子同士で“コイ”なんて気持ち悪い!!!大ちゃんの馬鹿!!変態!!!死んじゃえ!!!!!」

「チルノちゃん」
「な、なによ」

「ごめんね」

「!?」

「今日はもう帰るね、バイバイ」
「えっ、あっ、ちょっと待って…」

＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜

「大ちゃ…」

どういうことだか足がすくんでちっとも追い掛けられる気がしない。

「今日の大ちゃん変だよ、全然分かんない」

零れた言葉は地面に当たり緩やかに風と流れて行く。

「そこの妖精さん」

「だっ、誰!?」

ふと前を向くと全身にもやが掛かってよく見えないが、人のような姿をしたモノが佇んでいた。

今にも儚く消えてしまいそうだが、その反面強い存在感を放っている不思議な人物である。

「あ、あたいに何の用?」
「これ、欲しい?」
　そう言って、妖しく光る紫色の液体で満たされた、小さくて透明な小瓶が差し出された。
「な、なによこれ」
「これはね、全知全能の薬だよ」
「ぜんちぜんのう?」
「…何でも分かるようになるってこと」
「何も分かってないくせに」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

脳内を先程言われた言葉がこだまする。

「…さっさと寄越しなさい」

「はい、どうぞ」

いつの間にか手の中に、小瓶が収まっていた。

「あ、」

ふと顔を上げると、先程の人物は跡形もなく消え、爽やかな風が草原の緑を揺らしている。

「これ、貰っちゃった」

突然の出来事に、手のひらの小瓶を見て思わず呟く。

****

「チルノちゃん、知らない人から物貰っちゃダメだよ？」

****

かつて言われた戒めの言葉が脳裏をよぎるが、振り払うように頭をぶんぶんと振る。

「…じゃあ、飲むよ」

氷精は、瓶の蓋に手を掛けた。

その後どうなるかも知らずに。